

研究代表者村井章介（東京大学）

『8－17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流
—海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』上
2004年3月

舞台の上の唐人

——大蔵流山本家による狂言「唐相撲」を見て——

高橋公明

1. はじめに

先日、横浜能楽堂において大蔵流山本家による狂言「唐相撲」を見る機会があった。舞台に30名以上が登場する出し物で、通常の狂言とは様相がかなり異なる。とはいえ、子供の出演者も含めて、演技は十分に鍛え上げられており、たいへん楽しむことができた。

この狂言「唐相撲」は「唐人相撲」と言い習わされているもので、唐に滞在している日本人の相撲取りが帝王に暇乞いをする、帝王はこれが見納めとつぎからつぎへと唐人を送りだして相撲をとらせると、ことごとくその日本人に敗れてしまい、ついには帝王自ら相手にするという話である。唐の帝王と日本人相撲取りを中心とするこの筋立てからすると、「唐人相撲」よりも「唐相撲」のほうが題目としてふさわしいような気がする。ところで、能・狂言という舞台芸能のなかには「唐人」を主人公にしたものがあつた。ここではそれらの概要を確認し、議論すべき点を確認する。

秋山謙蔵は、このような素材を検討し、倭寇による人身の略奪・売買という現実の反映を指摘するとともに、舞台の上で中国語が使用されていることに注意を喚起し、当時の観客は簡単な中国語を理解したのではないかと推測した（1935年）。また、拙稿においては、このように外国および外国人が筋立てに関わる作品においては、ほとんどが日本の海外への出入り口を博多（箱崎）、中国のそれを明州（寧波）に設定している点に注目し、これが当時の日本人にとっての固定的イメージであることを指摘した（1995年）。以上の点を念頭におき、ここではさらに具体的に筋立て、台詞を検討する。

2. 謡曲「唐船」

15世紀以降、能・狂言という演劇的な表現はしだいに人気を増し、多くの人々に楽しまれるようになった。そのため、扱われる題材は、人々の生活に具体的に关わるものとなった。そのなかに「唐船」という能がある。それもまた当時の世相を反映したものであつた。

明州の祖慶官人は、日本船と唐船の争いに巻き込まれ、箱崎（現在の福岡市）に連れてこられ、箱崎某に召し使われていた。箱崎某は牛馬を多く持ち、祖慶官人に牛馬の世話を命じた。13年後、明州から2人の子「そんし」「そゆう」がやってきた。多くの宝を差し出し、父を帰国させようとする。また、祖慶官人には日本人の妻との間にできた2人の子もいて、いっしょに帰国しよ

うとする。ところが、箱崎某は日本で生まれた子の帰国を許さず、祖慶官人は双方の子にはさまれ愁嘆場となる。そこで箱崎某も折れ、全員で帰国することになる、という話しである。

「唐船」のなかで、いくつか注目すべき点を具体的に示してみよう。第1に、箱崎某が貿易船をもち、されに「牛馬を数多持て候程に、彼の祖慶官人に申付野飼をさせ候」と言っている点である。これは箱崎某の生業が商人であるとともに、牛馬を多く必要とする馬借あるいは車借、すなわち運送業であることを示している。博多湾の東側に位置する箱崎津の商人兼運送業者という、まさに「らしい」設定である。第2に、船争いによって人質となった人物を祖慶官人という、いかにも庶民ではないという役名にしていることである。この設定によって「野飼」をする祖慶官人の哀れさが強調される。第3に、祖慶官人の中国人の息子達が明州から来たことである。後で確認するが、舞台表現に限らず、いわゆる文学作品においても中国の出入り口は明州に固定されている。第4に、日本で生まれた子供達に、「唐土と日の本」のどちらが優れているかと聞かれ、祖慶官人は「唐土（もろこし）に、日の本（ひのもと）を喩ふれば、只今尉が率いて行、九牛が一毛よ」と答えていることである。

もちろん、祖慶官人の境遇がどのような背景から設定されたのか、判定することは重要であるが、それほど簡単ではない。演劇を楽しむ人々にとっても倭寇に関する情報は既知のもので、その設定がありそうなものとして選ばれたのか、もっと具体的に寧波の乱が直接的に影響を与えているのか一義的には判断できない。いずれにせよ、このような能が演じられる程、博多と明州との密接な交通関係は良く知られていたということである。

3. 能・狂言のなかの唐人

「唐船」の後日談に、やはり能で「箱崎物狂」がある。箱崎某の許しを得て、日本人の子も一緒に中国に戻ってしまったため、箱崎に残した母を案じた子のは明州から船を仕立てて箱崎に向かう。日本名を「千代若」「千代満」というこの兄弟は、箱崎で「狂女」となってしまった母と会う。何とか説得して母を船に乗せ、めでたく明州に戻るという話である。このような後日談ができること自体、「唐船」に人気のあったことを示している。

ここでは祖慶官人と日本人妻との間にできた子に中国名と日本名があることが興味深い。明州から船を仕立てて箱崎に向かうときには「祖範」「祖竹」と名乗っているが、箱崎に着き、「箱崎殿」から「おことは千代若・千代満（みつ）にてはなきか」と聞かれ、「さん候」と答えている。多くの境界人がそうであるように、状況に応じて名前も変えることができるのである。

また、「唐船」の筋立てを基本的にうけついで狂言に「唐人子宝」がある。唐人の扱いに細かな違いがあり、唐人を抱えているのは通訳として使うためだが、その仕事がないので牛馬の世話させていることになっている。通訳という、より具体性を感じさせる設定を加えている。日本人の子は登場せず、当然ながら単純な筋立てになっている。そしてこの狂言の大きな特徴は、唐人とその子の会話が中国語で行なわれるという点にあった。秋山謙蔵が紹介した台本によると、例えば、「ホウウライホウウライ」「チントンリヨヒイハンチントンリヨヒイハン」「クハイシイライクハシイライ」「チントンリヨ」というようなものであった。現在、読める台本ではもう少し分量が少なく、秋山の紹介したもののほうがさらに古いのかもしれない。単に観客を笑わせるために

中国語らしく発音しただけかもしれないが、中国語の何か、例えば浙江省あたりの発音からカタカナに移したものであるという可能性も捨て切れず、秋山も当時の観客はある程度の中国語を理解したのではないかと推定している。

中国語の会話は、狂言の「茶盃拝」（ちゃんはい）でも登場する。「茶盃拝」は、13年前に捕らえられ、箱崎に連れてこられた茶盃拝という唐人と日本人の妻の夫婦喧嘩を題材とする話である。ついに国際結婚まで狂言の題材となったのである。ここでもいくつかの場面で中国語があるいはそのような発音の台詞がある。

これらの作品について注目すべき点を挙げておけば、第1に唐人が重要な人物として出ていることである。とくに日本人の母から生まれた兄弟は日本名も持っており、筋を作る上で、そのような現実が参考にされたのであろう。倭寇・日明貿易・寧波の乱などがこれらの筋立てに反映しているのは間違いないところである。第2に、会話の一部が中国語あるいはそれに似せた発音でなされていることである。これについてはとくに古い台本に注目して言語学的な研究をすべきであろう。第3に、舞台が箱崎という博多湾内の港に設定されていることである。神功皇后伝説とか蒙古襲来などの舞台となった筥崎宮があり、博多津のやや東に位置するところで、博多津の影響下にあるところである。もちろん、ここで上演された可能性が高い。第4に、唐人が捉えられたり、中国から出発したりするところが「明州」だということである。明州とは浙江省の寧波のことである。甬江の河口から10キロメートル上流にある、余姚江との合流点の港町で、唐代に明州、南宋・元代に慶元、明代に寧波と呼ばれた。

なお、明州についてはさらに追加できる。舞の本のなかに、「大職冠」（たいしょかん）という藤原鎌足の次女が唐の皇帝の後になるという話があり、そのなかで、次女の「紅白女」（こうはくにょ）およびその一行は「難波の浦」から出港して「大唐の明州の湊」に着く。また、父鎌足が建てた興福寺に仏具・法具を送ろうとして、これもまた船は「大唐の明州の湊」から出港している。同じく「笛の巻」という牛若のもっていた笛の由来を尋ねるという話があり、ここでも弘法大師は明州から帰国している。おそらく中世文学のなかで中国の出入口に言及する場合、そのほとんどは明州であったと思う。そして日本側のそれは、やはり博多およびその周辺であったようである。

4. 明州からきた唐人

日本列島と中国大陸の交渉を長期的な視点で見ると、大雑把に言って九州と浙江省の関係もとても深い。それを象徴するのが文学表現のなかの明州であった。その基礎となる現実をいくつか紹介してみよう。

15世紀初めに西日本地域を旅した朝鮮人外交官宋希*の記録『老松堂日本行録』を素材とする。『老松堂日本行録』は、回礼使宋希*が応永27年（1420）に朝鮮の漢陽（現在のソウル）から日本の京都まで往復した際の見聞や感慨を、詩およびその序に託した紀行詩文集である。なお、老松堂は宋希*の号である。

この回礼使の公式の使命は、室町将軍足利義持に会い、朝鮮国王世宗の答礼の意を伝えることにあった。ただし、さらに重要な使命は、応永の外寇後の政治情勢を探ることにあり、そのため、

各地でそれに関する情報を『老松堂日本行録』のなかで書き留めている。しかしながら、宋希*の関心はそこに留まらず、日本列島内のさまざまな、そして今となっては貴重な話題を書き残している。それらを検討し、当時の社会のある傾向について考えてみたい。

宋希*は、約7ヶ月間の西日本滞在中に、少なくとも5人の中国人・朝鮮人について記述している。

ア 唐人：対馬島に沿って移動している時、倭人の漁師が小舟にもって魚を売りに来た。その舟のなかに「我れ是れ江南台州の小旗なり。去々年虜せられて此に来たりて、削髪して奴となる。辛苦に勝えず。官人に随いて去らんことを願う」という2年前に浙江省の台州で被虜人となった元下級軍人の奴隷がいた。漁師は米と交換で売ると主張したが、結末不明である。

イ 陳吉久（平方吉久）：博多商人。前年朝鮮に往き、回礼使を先導し、各地で接待している。祖父陳延祐は台州の人で、明初に博多に渡来し、聖福寺の僧になる。父陳外郎は京都で足利義満に仕えた。

ウ 魏天：70歳すぎの人。子供の頃に、中国で捕えられて日本へ。その後、朝鮮に往き、李子安の奴となる。回礼使に従って来日した時、明の使節が奪って江南すなわち浙江省に帰る。皇帝の命令でまた日本に往き通訳となる。妻を娶り二人の娘を生む。足利義満に可愛がられ、大金持ちにもなる。回礼使を手厚くもてなす。

エ 陳外郎：イの父。ウとともに京都で回礼使を接待する。

オ 三甫羅（三郎）：瀬戸内海の海岸沿いで、帰路立ち寄った全念寺の門前にすむ朝鮮人である。

対馬島・博多・瀬戸内海・京都などで奴隷・通訳・商人などさまざまな職業・身分の外国人に会っている。ただ見かけただけでなく、すべての例と宋希*は何らかの交流をしており、けっして少ない数とはいえない。そのなかでもアとウは海賊に連行された人で、奴隷として日本に来ている。これは、これより少し前まで猛威をふるっていた倭寇にともなう現象である。またイとエは、これも少し前の元明交替期に来日した一族である。いずれも、同時代の東アジアの大きな変動に対応した現象であり、宋希*がとくに多くの外国人に会ったとはいえない。都市あるいは交通路にそってこのような外国人がかなりいたと考えられる。そして、中国系の人はいずれも本人あるいは一族が浙江省出身であった。また、陳吉久には同時に平方吉久という名前があり、朝鮮人の「三甫羅」も日本の名前だけでなく同時に朝鮮の名前もあったに違いない。

倭寇の活動にともなって、捕えられる人々を被慮人というが、有井智徳は1372年から1466年の間に中国で捕えられ日本に連行され、何らかの理由で高麗・朝鮮を経由して帰国した例59件を見出した。そのうち、被慮人にされた地点が判明しているのが17例で、そのなかの14例が浙江省であった。また、15世紀後半、対明・朝鮮の通訳として活動した柴江・林從傑とか、1523年におきた寧波の乱の当事者で、遣明船細川船の綱司宋素卿などは、いずれも元被慮人で浙江省の出身である。さらに、慶長の役で被慮になり、日本に3年あまり抑留された鄭希得の日記『月峯海上録』によれば、帰国の途に就こうとしていた阿波で、天文22年（1553）に浙江省の温州で被慮人になった中国人に会っている。また、対馬島で、永禄2年（1559）にやはり温州で被慮人になった中国人呉東川とも会っているが、鄭希得は、この人は日本での滞在が長く、ほとんど日本人のようだと観察している。

以上のように15・16世紀に日本列島にやってきた、あるいは連れてこられた中国人の多くは浙江省出身であった。浙江省と九州を結ぶ線は日本列島と外の世界を結ぶルートとして、もっとも太い線だったのである。この線を通じて多くの人・物・情報が流れたのである。

名古屋市の蓬左文庫には「大明九辺人跡路程全図」という古地図がある。1663年に刊行されたものを日本で復刻した地図で、日本人によって追加された形跡がない。そのなかに、日本は「即ち古の倭奴地、浙江の東海中に在り」とあり、中国側からも同じように見られていたのである。また、「清国十六省之図」は、17世紀前半の中国とその周辺を描いた中国製の地図を延宝9年（1681）に日本人が写したもので、海のなかに赤い線が2本あり、1本は大琉球から福建省に向かい、残りの1本は九州の西の中ほどから浙江省の定海に引かれている。これは日本人によって引かれた可能性が強いが、後世になってもこのような観念は強く残ったのである。

5. 今後の課題

舞台上で演じられる芸能のなかから、外国人が登場するいくつかの演目について述べてきた。「唐相撲」を除けば、いずれも脚本というべきものをテキストとして検討したにすぎず、衣装・仕種など視覚的に確認すべき点がいくつかある。もちろん、長い歴史を経ており、当時の演出がそのまま維持されているわけではない。それでも、やはりこのような議論を深めるために、機会があれば、観劇してみたいものである。

<参考文献>

秋山謙蔵『日支交渉史話』内外書籍、1935年。

同前『倭寇』による朝鮮・支那人奴隷の掠奪とその送還及び売買『社会経済史学』2-8、1932年。

有井智徳『高麗李朝史の研究』国書刊行会、1985年。

高橋公明「東アジアと中世文学」『岩波講座 日本文学史 13・14世紀の文学』岩波書店、1995年、309-327頁。

同前「外国人の見た中世日本」佐藤信・村井章介・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社、1997年、181-205頁。

<史料>

『日本古典文学大系38 御伽草子』岩波書店、1958年。

『新日本古典文学大系57 謡曲百番』岩波書店、1998年。

『新日本古典文学大系59 舞の本』岩波書店、1994年。

『未刊謡曲集 続十一』古典文庫、1993年。

北原保雄・吉見孝夫『狂言記拾遺の研究』勉誠社、1987年。

村井章介校注・宋希*『老松堂日本行録』岩波書店、1987年。

若松実訳・鄭希得『月峯海上録』日朝協会愛知県連合会、1992年。